

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑩旅は続く

村本 邦子

設立から毎年発行している研究所年報22号の編集が終わった。今年の特集テーマは珍しく「家族」だ。大学では、「家族クラスター」に所属しているので、家族は中心的なテーマではあるが、私自身は、あまり「家族」という切り口で物を語ったことがない。たぶん、私にとっては、家族の境界はかなり緩くて、それがあまり明確な概念ではないからだと思う。家族の仲が悪いわけではないが（どちらかと言えば、むしろ仲が良い方ではないかと思うけれど）、家族のかたまりに対するこだわりは薄い。

幼稚園の初めてのお泊り遠足の時のことを思い出しては、母から、「みんなはお母さんと別れたくないって泣いてるのに、あんただけは眼をキラキラ輝かせてねえ。薄情

なんだから」と冗談交じりに何度か言われたことがある。高校生の頃、一ヶ月アメリカへ派遣される時も同様だった。でも、それを言うなら「こちらも同じ言葉を返しましょう」という感じで、どの家族も涙ながらに空港で別れを惜しんでいるのに、うちの家族だけは、みんなニコニコしていた。田舎だったから、「女の子は家から出てはいけません」というお嬢さんが多いなかで、そんなことを言う人は家族に誰もいなかった。

逆に言えば、それだけオープンでもあり、関係のない人がひょんなことでしばらく一緒に住んだというようなこともあったと思う。詳しい経過は知らないが、父の友達の奥さんが赤ちゃんを置いていなくなってし

まったので、うちで面倒を見ていたようなこともあった。ついでながら、一緒にしてよいのかどうかわからないけれど、父がどれだけ多くの鳥や動物たちを我が家で育ててきたか、とても数えきれない。

私自身も、学生時代、一年間、先生のお宅のお留守番をしていた時代があったが、夏休みの一ヶ月、妹や弟たちがやってきて（私は4人きょうだいの長女だ）、食事やら洗濯やら受験勉強まで面倒をみていたことがあったし、まだ子どもたちが小さい頃、従兄弟の面倒をみてやってくれないだろうかと頼まれたこともある（さすがに都会の狭いマンション暮らしなので断ったけど）。何かの事情で誰かがうまくはまるころがなくなれば、縁のあった誰かの家で面倒をみる・・・昔の家族はそんなふうではなかったのか。

思い出してもおかしいのだけれど、息子がまだ小さな頃、ふと気づくと、ファミリーレストランなんかで、よその家族の輪の中に入ってちょこんと座っているような場面があった。今なお、子どもたちはよそのお宅で大事にしてもらっているが、よその家族に自然と溶け込んでしまう性格では、ずいぶん得をしていると思う。よくよく考えてみると、夫にもそんなところがある。そして、そういう性格は、かえって人からつけこまれたり裏切られたりしないようだ。

子育てをしていると、「我が子が一番」的な親馬鹿なところもなかったわけではないが、それでも、よその子でも、よその大人でも、すぐに我が子のような気持ちになる。

そんな気持ちは必ずしも相手に伝わるわけではないし、余計なお世話だろうから、失礼にならないよう、わきまえはしているつもりだが。だから、昔から、いつかは孤児院（今は児童養護施設ですね）を開きたいなど漠然と思ってきた。そしたら、下の妹が就職して手伝ってくれることになっている。

そんなわけで、私にとっては、旅の道連れは家族かもしれないし、赤の他人かもしれない。少なくとも言えることは、長く一緒に時間を共有してきた人たちは、情が刷り込まれてしまい、私にとって、ほとんど家族であるということだ。女性ライフサイクル研究所の仲間たちは、明らかに家族（すでに子孫も繁栄しているので、むしろ拡大家族）の感覚だし、家族クラスターの同僚や卒業生たちもそれに近い。とは言え、こんな感覚は一般的ではなさそうだし、今年は、急に「家族心理学研究」という授業科目を担当することになり、「東日本・家族応援プロジェクト」も立ち上げたことだし、一度、「家族」を客観的に考えてみようと思って特集を組んだのだった。

研究所の年報は、毎年、特集のテーマを決め、月一回の会議でそれぞれのテーマを議論しながら、原稿を練り上げ、皆が書き上げてから私が序文を書き、お盆前に原稿を入れるというスケジュールになっている。一応、所長として編集責任の自覚があるので、皆が締め切りを守れなかったり、うまく原稿をまとめられなかったりしても、最終的には面倒を見てきた。私が研究所から身を引くにあたって、これをどうしていく

かが、実は、検討事項のひとつとして残っている。少なくとも現時点では、私が手を引けば、継続して年報を発行していくことは難しいし、できたとしても、所長として名前を残してよいという内容のものにはならないと思う。

それで、今年は限界設定をし、4月の宿泊研修までに第一稿を仕上げる約束にしていたが、結局、これは実現せずだった（個別には守ったスタッフもいるが）。それで、後はもう面倒を見ないことにして、年報会議にも出ず、知らん顔をすることにした。どうするつもりなのか横目では見ていたが、みんな最後まで協力し合って頑張った。それで、最後の一回だけは面倒を見ることにして、結局、8月頭までかかって仕上がった。発行の締切に間に合わすには、私が序文を2日で書かなければならないという。そんな馬鹿な。みんな、どこかで私が魔法使いのように辻褄を合わせてくれるだろうと思っているような気がする。実際には、このために、一週間、休暇を返上した。結果的には、それなりに良いものができたかなと思っている。来年、もう一回だけは面倒を見てもいいかなと思っている。ただし、来年は本当に4月で終わりにしよう。

この連載で、女性ライフサイクル研究所の設立前から20年を振り返ってきた。完全に所長を退いてバトンタッチしましたというところまでいって連載を終わるのが理想ではあったが、今のところ、まだ私は所長をやっているし、一定程度まで、その役割を果たし、自分自身の仕事も担当している。それでも、この1~2年、つまり、この連載

を始め、研究所が二十周年を迎えてから、相当程度身を引いてきたのは事実だ。次の事業展開についてはもう責任を持つつもりがないので、迷いが残っているのは、上記の年報とブログに月一で連載している「今月のトピック」。年報は、研究所のバックボーンとなっているので、もうしばらくは条件付きで面倒を見て、ブログはどこかで区切りをつけようかなと思っている。

私抜きにスタッフの皆がどんなふうに働いていくか、遠巻きに眺めているが、悪くない。リーダーシップを取ってくれているメンバーたちも、それぞれの限界だったところを越えて、さらに成長を続けている。人間の可能性はたいしたものだと感嘆させられるし、若い層もそれぞれなりに頑張ってくれている。すでに若手ではなく、立派に中堅どころであるが、自分のことだけでなく、次世代を育てることをしっかりと考えてくれている。こんなふうに世の中を眺められるのは幸せなことだと思う。

もとはと言えば、大学院での専門家集団に馴染むことができず、一人で現場に飛び込んだのが始まりだった。進路変更を考えてみたこともあったが、結局のところ、心理臨床の世界でやってきた。世慣れて擦れた大人にはなりたくなかったし、志を持つ専門家でありたいと願いつけてきた。女性と子どもが直面する問題を世に問うという仕事は、ある意味で厳しいものだった。年を取りつつある今となつては、そういうことも少なくなったが、どうしても譲れない一線があって、闘いつつなければならぬこともあった。それでもやってこられたの

は、仲間があったからだと思う。

これまでも書いてきたように、関係性から言えば、私が責任を取らなければならない部分が大きかった。それだけ荷は重かったとも言えるが、自分で責任を取る覚悟さえあれば何でもできたとも言える。女性ライフサイクル研究所は、ある意味で、私にとってのラボであり、サンクシュアリだった。理想主義をどこまで実現できるかという意味でのラボであり、つねにそれが可能であったという意味でサンクシュアリだったのだ。

キャサンリン・フィッシャーの『もつとうまく怒りたい～怒りとスピリチュアリテイの心理学』(村本邦子訳、学陽書房)には、「場での離反」という概念が出てくる。これは、支配的な父権文化と、周辺部に現れつつある新しい文化の両方を表すものであり、留まりながら去るという両方を意味するメタファーだ。古い関係の仕方や考えから去り、まったく新しいやり方で、現在に留まる。抑圧的な権力関係は、私たちの中にも入り込む可能性があるが、小さなグループで集まることで、女性たちは、別の種類の力を経験し、洗練させていくことが可能になる。支配と抑圧とは違うこの力は、むしろ、愛に近いだろうとフィッシャーは言っている。互いに与え、受け取り、変化し、変化させられるような相互的結びつきのなかに見いだされる力である。このような力は、参加者たちの能力を解放し、行動へと力づける。

今、私がいるのは、もはやそんな場では

ない。もっと一般社会に近いだろう。子どもの頃、「世界中を全部つなげてひとつの大きな家を作ったらいいのに！」と空想していたことがあるが、世界がみんなでひとつの家族になることはないだろう。それでも、今や、地球がひとつの運命共同体であることは間違いない。ラボもサンクシュアリも現実の一部である。どこまで続くかわからない旅路ではあるが、まだまだ学ぶべきことは多く、人生日々修行と違って努力を続けている。

旅はどこまでも続く。もとよりパッケージ・ツアーは利用しない主義だ。楽で無難な旅はつまらない。パーソナルであることで、その時々気持ちやめぐりあわせを楽しむことに開かれていたい。一人旅が好きなのわけではない。でも、基本的に人生は一人旅だ。だからこそ、その時々で縁あって一緒になった人たちとの時間を大切にしたいと思う。たまたま同じ車両に乗り合わせたというだけの人もいれば、気が合ってしばらく同行する人もある。願わくばできるだけ長く一緒に旅ができたらと願う人もある。でも、それは自分で決められることではない。何しろ、自分でも行先のわからない旅である。いろんな偶然に左右される。そんな偶然を楽しみ、唯一の我が人生を愛おしみたいと思う。

おわり